

投句欄 自由律の泉 ㊟

- 1 姉上 とうとう写真の人になる2025年11月29日
増田 壽恵子
- 2 地上150センチの目線で生きる風景
竹内 朋子
- 3 且座喫茶遊ばせていただく梅ほころぶ
大岳 次郎
- 4 待ち人來ずサクサクと春を刻む
原 さつき
- 5 どうせゴミになる
無 一
- 6 芹摘みしコンクリート護岸
木村 浩
- 7 鳴かず飛ばずでコタツで眠る 楽だもの
金澤 ひろあき
- 8 長春 青苔の碧緑
アカホリ ユキ
- 9 もう吐く毒もない口をすすぐ
久光 良一
- 10 湯タンポの ぬくもりこそが 冬の味
末永 碩人
- 11 日向ぼこ爪切る音集めている
鈴木 和枝
- 12 今年も一枚殻脱いで新しい殻まとう
黒瀬 文子
- 13 あえかなる冬日に干された洗濯物
平林 吉明
- 14 涙も出ない悔しさを抱きしめる
青井 こおり
- 15 目覚めて話す野菜畑と
田中 直心
- 16 安寧の日となる乳飲子の嘔気
一の橋 世京
- 17 最後のトンネルに「迷路」とある
富永 鳩山
- 18 山茶花に見守られひとつひとつ転ばぬように
山本 説子
- 19 あの人と糸電話で話したい
佐川 智英実
- 20 いつの間にか侵されていく いつの時代も
富永 順子
- 21 いつのまにか消えていた節分草追っかけても
原 鈴子

22	古い二人へ片コトことばが花の花	佐瀬 風井梧
23	かさぶたむしり血流し 世界	雨水
24	雪下ろしにコーヒー樋から雫	泥谷 文吾
25	胸に溜りきつていゝものがこぼれる ガザよ	部屋 慈音
26	公民館は敬老会の春のコーラス	平岡 久美子
27	風花のお迎えが来て逝ってしまった	ちば つゆこ
28	花が弧を描く蝶も遅れて弧を描く	荻島 架人
29	許せない人三人 積もった雪あたたかい	井尾 良子
30	わずかばかりの雪を子が踏んでゆく	さいとう こう
31	祈り事また増え 銀杏だらけの八幡社	見崎 厚志

● 泉②⑧より 一句鑑賞

店の秋ほのかほどけるほどの茶碗

野谷 真治

▼立ち寄ったお店、茶碗といったささやかな物から詩を起こす。音やリズムを重視する。この句も「ほ」の音のくり返しで、しみじみとした声調になっている。日常を詩化する人。あなたの早すぎる死が悲しい。

(金澤 ひろあき)

▼飲食店かそれとも瀬戸物屋の店内か、茶碗にフォーカスして秋の風情をさり気なく「ほのか」「ほどける」「ほどの」と心地よい韻律で詠い上げていて、心にくいばかりの老練の技を感じます。このような言葉の使い方に長けた方の自由律俳句をもう読むことが出来ないと思うと残念で仕方ありません。

(平林 吉明)

▼作者とは口語俳句で名前は存じ上げていました。数十年のお仲間でした。句の選評も今回限りかと思うと悲しいですね。この句の茶碗は使われたかと思いました。

(平岡 久美子)

田の話に耳傾けてる父遺影

鈴木 和枝

▼あくまで個人的なイメージです。沢山集まりきつといろいろな話をしている中で作者の耳に田の話が入って来たのでしょう。遺影の父上も同じように聞いているんだな。情景が浮びます。

(木村 浩)

▼代々続いた田んぼのこれからの話でしょうか。亡父への気遣いが感じられ切なくて温かい。どんな事になっても遺影は優しく見守ってくれるでしょう。

(富永 順子)

浮いた菊の花びら一人呑む

木村 浩

▼菊の香りが口一杯に広がってきました。静かで品のある素敵な句ですね。
(佐川 智英実)

いまは巨大な墓場に見えるあこがれの都会

無 一

▼62年前の3月1日、高校卒業の日に帰る時間もなく夜行列車に乗ってあこがれの大阪へ向かった。大分県境の田舎育ちである。入社すると名古屋のど真ん中にある店へ配属された。今は山暮らしをして就活？に入った。
(泥谷 文吾)

振り向き振り返る母点になる

原 さつき

▼さよならを何度言えたいの という歌詞を聞いたことがある。はっきり背を向けるにはやはり気持ちを切る勇気がいる。母娘の別れの時の切ない気持ちが伝わってきます。歯切れも、リズムも自由律らしい仕上がりですね。
(部屋 慈音)

「元気をあげるね」と言う人の手のぬくもり

山本 説子

▼人の優しさ、感謝の気持ちが目の前に感じます。
(見崎 厚志)

くるくると丸文字の群わが手帳

井尾 良子

▼丸い字を書くあなたは、温かなお人柄。温かな生活がわかります。それに比べ、ああ、私の字は始終とんがります。
(ちば つゆこ)

二歳児とあそべばたちまちメルヘンの世界

ちば つゆこ

▼私にも孫が二人いて、もう高校受験と小学校高学年になりましたが、幼き日の思い出は今も胸に刻まれてます。叶うならばあの日に戻りたいと思います。尚8番と32番にも心ひかれました。
(末永 碩人)

時を待つ蕾の命の深呼吸

荻島 架人

▼この季節、蕾は命の深呼吸をしていたのですね。「何も咲かない寒い日は下に下にと根を伸ばせ」の言葉を思い出しました。
(田中 直心)

お別れもなく大きな目だけ落ちていく

平岡 久美子

▼お別れもなく、会うことのできなくなった人だが、いつも自分を見守ってくれていたやさしい大きな目は、今も自分をしっかりと見守っている。というそんな思いの句であろうか。印象的な句である。
(久光 良一)

▼別れ、大切な人の死。いつも感じることだが何か心残りの後悔が付きまとうその別れ。あの世で叶うならもう一度会いたい。魅力であった大きな目ばかり思い出す。「落ちていく」、そこにあるように思える。
(原 鈴子)

おどしたりすかしたり不機嫌な体とつきあう

久光 良一

▼私は女性ですが、高齢になると同じ様な状態になるのでしよう。私も句の様にひとり生活しています。しかし最近、ひとりの生活がとてもし淋しく感じる様になりました。どの様にすれば良いでしょうか。
(増田 壽恵子)

▼私にも当てはまります。

(無 一)

▼おどしたりはしませんが、私も杖を頼りに不機嫌な体と付き合っています。実感が伝わってきます。
(富永 鳩山)

点呼とります 生きていますか

新山 賢治

▼「生きていますか・・・しんみりした空気が一気に明るく元気が出てきます。こんな人に介護されたら幸せですネ！ 即座に手を上げて生きています」と答えます。
(竹内 朋子)

今年の金木犀 なぜか大きく香る

白松 いちろう

▼季節になると町中金木犀の香りがたちこめる。作者は今年はずがう、香りが一段と増し良い香りと感じた。この一瞬の香りに意図しない生きている喜びが表現されている。病気で退院して家でくつろぐ、そこで感じた生きているという喜びであろうか、巧まない好句だと思った。

(佐瀬 風井梧)

じっとしたままもつれている紐の性分

富永 順子

▼紐は自分では動けない。もつれたままされるがままの紐の悲哀と、それに似た性分の人たちの悲哀が重なって見える見事な句だと思いました。

(一の橋 世京)

老体を投げ出す露天風呂ひとり

泥谷 文吾

▼老体を投げ出す露天風呂ではあるのだが、ひとりなのです。物質的には確かに心地よいのだが寂しいものです。投げ出す露天風呂ひとりであるびろ心地よいのだが、老体なのです。さても「楽」と「寂」たのしみましょう。

(大岳 次郎)

▼お一人でゆったりと露天風呂宜しかったですね。そう言えば私にも一人露天風呂があり、雪が降ってきて何とも言えない素敵な時を過ごしました。嬉しい事思い出させて頂きありがとうございます。(山本 説子)

雑草摘む摘む 老後がこんなに長いとは

見崎 厚志

▼摘む摘むのくり返し、老後の時間の長さを際立たせ、雑草と老後がシンメトリーのようにおもしろい。最後に残されたご褒美の時間、楽しみたい。

(原 ギョウキ)

名前間違っただけの老母の思い出は鮮やか

青井 こおり

▼「鮮やか」の言葉にひかれます。生き生きとそこに存在する、その姿を思い浮かべられる、素直な句だと思えます。「鮮やか」をより強調すれば、違う味わいが出てくるように思われます。

(雨水)

▼年を取ってくる人と人の名前は本当に覚えていない。さつきのこと忘れても昔のことは一人一人の思い出と共に思い出せる。そんな時の母の顔は生き生きと楽しそう。

(井尾 良子)

風にあそばれて落葉だんだん寄り添う

原 鈴子

▼風の強かった日は、うちの玄関先でも落葉が隅に固まってしまっています。それを寄り添っていると見る視点が優しく心に残りました。

(青井 こおり)

▼てんでに落葉は風にあそばれてくるくるしている、いずれ片すみに集まるのです。その表現がとても上手です。

(鈴木 和枝)

※会員の野谷さんが昨年十一月に亡くなりました。野谷さんは協会のニューズレターが届くといつも一番早く作品を届けて下さったことを忘れません。ここに冥福をお祈りいたします。

● 係より

次回も、皆様の作品一句と、今回の作品の感想をお寄せください。左記宛て、同封の投句用紙、またはメールにて。

〈送り先〉〒193・0832 八王子市散田町2・58・4

平岡久美子

メール izumi.jiyuritsu@gmail.com

〈締め切り〉2026年 5月10日

★「自由律の泉」にご投稿いただいた句や感想は、自由律俳句協会のホームページや公式X、機関誌などでも紹介させていただきます。